

海外研修経験から見た 大学図書館（とその周辺）

2024年度大学図書館職員短期研修 2024年10月22日（火）

神戸大学附属図書館電子情報グループ情報システム担当 花崎 佳代子

内容

- 自己紹介
- 概要・経緯 （+ オープンアクセスの紹介）
- 調査内容・感想

自己紹介

2004.10-
2008.3

受入・目録

2008.4-
2010.6

利用者対応・ILL

2010.7-
2015.3

受入・目録・利用者対応

2015.4-
2023.6

リポジトリ・デジタルアーカイブ

2016年度 リポジトリ推進委員会作業部会協力員
2017-8年度 JPCOAR作業部会員
2016.9 英国視察

2023.7-

システム・ネットワーク・機器

2022年度～ 国立大学図書館協会資料委員会OS小
委員会TF（2024年度～同委員会作業部会委員）
2024.2 英国視察

概要・経緯 (+ オープンアクセスの紹介)

概要

枠組み	<u>国立大学図書館協会ビジョン2025の推進にかかる予算措置</u>
テーマ	公的助成機関によるオープンアクセス方針に関する英国の事例調査
旅程	2024年2月10、11日～18日（うち3～4日間は移動日）
参加者	尾城友視さん（国大図協OS小委員会TF、東京大学）、花崎 の2名

訪問先	<ul style="list-style-type: none">•Imperial College London•University College London•King's College London•University of Kent•Jisc
-----	--

スケジュール

日にち

訪問先

2月10日(土)-11日 (日)

移動日

2月12日(月)

Imperial College London (ロンドン)

2月13日(火)

University College London (ロンドン)

2月14日(水)

Jisc (ロンドン)

2月15日(木)

University of Kent (ケント)

2月16日(金)

King's College London (ロンドン)

2月17日(土)-18日 (日)

移動日

(少しだけ) オープンアクセスの紹介

オープンアクセスとは

オープンアクセス

学術論文がインターネット上で、誰もが無料で利用可能な状態にあること

グリーンOA

機関リポジトリ等で
学術論文
(著者最終稿含む) を
公開する

ゴールドOA

APCを払うことで
学術論文がOAで
出版される

ダイヤモンドOA

プラットフォームや
出版社ウェブサイト等で
学術論文を公開する

* 著者からも読者からも
料金を請求しない

参考) オープンアクセス (OA) に係る海外動向調査

<https://www8.cao.go.jp/cstp/tyousakai/hyouka/haihu145/haihu-si145.html>

(少しでも) オープンアクセスの紹介 それぞれの課題

オープンアクセス

学術論文がインターネット上で、誰もが無料で利用可能な状態にあること

グリーンOA

- 出版社に著作権を譲渡
- 著者最終稿／エンバーゴ

↑ 権利保持戦略により対応

ゴールドOA

- ハイブリッドOA：二重取り
- APC総額の増加
- APC負担可否の格差

↑ 問題の一部には
転換契約により対応

ダイヤモンドOA

- 比較的小規模・散在
- 品質基準やスキルの確保
- 持続性（財源、運営モデル）

参考) ダイヤモンド・オープンアクセスのための行動計画

<https://www.scienceeurope.org/media/j1fpzuem/202308-diamond-oa-action-plan-jp.pdf>

国内の状況

- 2023.5 G7広島首脳コミュニケ
「論文等のオープンアクセスについて（論点とりまとめ）」（※1）
- 2023.10 公的資金による学術論文等のオープンアクセスの実現に向けた基本的な考え方（※2）
- 2024.2
- 学術論文等の即時オープンアクセスの実現に向けた基本方針（※3）
 - 「学術論文等の即時オープンアクセスの実現に向けた基本方針」（統合イノベーション戦略推進会議令和6年2月16日決定）の実施にあたっての具体的方策（※4）

※1

<https://www8.cao.go.jp/cstp/gaiyo/yusikisha/20230525.html>

※2-4 <https://www8.cao.go.jp/cstp/kenkyudx.html>

2025年度新規公募分から、
論文・根拠データは
機関リポジトリで
即時公開義務化

→どうする？！

英国の状況

-
- 2013.4 RCUKのOA方針で論文OA義務化開始
-
- 2016.4 REF2021のOA方針で論文OA義務化開始
-
- 2022.4 UKRI（前身：RCUK）の新OA方針で論文即時OA義務化開始
-

“即時”ではないが、
“受理後3か月以内にリポジトリ登録”が義務

→受理時に研究者が
リポジトリ登録するのを
基本とする機関も

参考)

<https://current.ndl.go.jp/ca1903>

<https://crl.acrl.org/index.php/crl/article/view/25872>

<https://www.magazine.jpcoar.org/news/b5f51a44-e477-4760-9c05-c6077352f587>

タイムライン

2023.10-12 英国のOA状況調査・訪問先ピックアップ

2023.12 予算措置の申請

2023.12-2024.1 訪問先への打診・旅程決定

2024.1-2 質問票/日本の状況説明資料の準備・送付

2024.2 視察

2024.3 報告会（※1）

- 前回訪問機関
- OA率
- Jisc提供ツール
使用機関 等

※1 <https://www.janul.jp/ja/news/20240417>

調査内容・感想

主な質問内容

Jisc

- OAに関する方針（グリーン/ゴールド/ダイヤモンド）
- 出版社との交渉
- 論文登録・モニタリングのサポート
- 著作権処理、権利保持戦略
- ゴールドOAやダイヤモンドOAのサポート
- 研究データ管理・公開サポート

研究機関

- 論文登録のワークフロー
- 組織体制、スタッフ、財源
- 著作権処理、権利保持戦略
- ゴールドOAやダイヤモンドOAのサポート
- Jisc提供ツールの使用状況
- 研究データ管理・公開サポート

英国の即時OA対応：事例

Jisc

- OAのルートは問わず、即時OA方針順守のオプション整備を約400出版社と交渉
- リポジトリへの論文登録支援ツール (Publications Router)
- OA方針順守のための情報集約・提供 (Sherpa Romeo、Journal Checker Tool)
- 転換契約のとりまとめ・レビュー
- 権利保持戦略導入支援 など

研究機関

- 受理時に論文登録するワークフロー
- JiscのツールやCRIS・リポジトリの機能を使用した登録省力化
- グリーン/ゴールドOA双方を含む担当部署
- 研究機関レベルの権利保持戦略導入
- 転換契約の情報集約・提供、APC管理、契約のための検討や評価

英国の即時OA対応：背景

- REFのOA方針の持つ強い強制力
- OA方針実施のため、助成機関⇒大学へ配分されるブロックグラント
 - グリーンOA・ゴールドOA含め、OA方針実現のために使用可能
 - そのため、APCの管理を大学図書館が行う場合も多いと思われる

背景が異なるため、
そのまま日本で活か
せる/活かすのが得策
とは限らない

英国の即時OA対応：進め方

- 意思決定時、**ステークホルダーの意見を集め反映**する仕組みがある
 - 助成機関のOA方針詳細決定過程で、コンサルテーションやワークショップ、インタビューなどを実施
 - Jiscを中心に、助成機関や研究機関、出版社がコミュニケーション
- 取り組み前後には**シミュレーションやレビュー**を行い、その**過程を公表**
 - OA方針詳細決定の過程で様々なシミュレーションや委託調査を実施
 - Jiscによる「**転換契約**」に関する詳細なレビュー
- 論文のOA率だけではない様々な側面からの検討
 - **投稿先に関する研究者の選択の自由**
 - **学術情報流通の持続性・公平性**

「何をやっているか」以上に「どう」進めているかの部分に、特に学びたいことが多いと思いました

よかったこと/反省点

- インタビューで冒頭に資料を使って日本のOAの状況を説明したことで、その後のコミュニケーションがスムーズだった
 - 渡航前に、今まで調べたことと改めての疑問点を一度まとめてみたことで、報告の作成時に役立った
 - 下調べによって、詳しいことまで質問することができた
-
- トピックの設定が広範囲になってしまった
 - インタビュー先機関の性質が多様になるとよかった
 - 英語力をもっと鍛えておくよかった（ビジネス英語、シチュエーションを想定した英会話の練習など）

海外視察のメリット

- 事前準備も含め、あるトピックに対するまとまった知識を得られる
⇒ 今後の情報収集・実務にいかしていける
- 調査自体のノウハウを得られる
- 色々な経験ができる
例：セミナーや記事などでの報告、英語でのやりとり、海外での経験
- 自分の問題意識や展望に気付くきっかけになる

海外視察を通じて

- 普段から、今の担当業務にかかわらず、興味のある分野について考えてみる
- 海外視察に行った後のモチベーション
- 継続的に取り組むための持続可能なやり方の確立

ありがとうございました

&

これからもよろしくお願いします！